

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

講演2 ヒト、モノ、カネ、情報とネットワーク ： 華僑世界との対比において

HAMASHITA, Takeshi / ハマシタ, タケシ / 浜下, 武志

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

25

(開始ページ / Start Page)

197

(終了ページ / End Page)

215

(発行年 / Year)

1999-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00015855>

ヒト、モノ、カネ、情報とネットワーク

—華僑世界との対比において—

浜下武志

田中先生は『江戸はネットワーク』というご著書、私たちの必読文献ですが、そこでネットワークをすでに論じていらっしやつて、私は本日ネットワークということで、先生がカバーなさっている一部を少し申しあげたいと思っています。

きょう考えてみたいと思っておりますことは、一昨日私は、ちょうどマニラにいました。マニラで国際華僑学会という三年に一回の会議がございまして、そこでインドネシアの華人・華僑の問題もたいへん大きな議論となりましたけれども、同時にアジアだけではなく、欧米の華人・華僑の問題をどう考えるかということもたいへん熱く議論されました。

私はそのこの討論のテーマとは別に、私たちが華僑・華人という存在だけで、これだけ世界から集ま



ってこういう議論をするというエネルギーはどこから出るだろうかという印象ももった次第です。そのことは、ちょうど沖縄のウチナンチュー世界大会で私が感じた熱気というか、あるいは存在、そこにいること自体が一つの大きな主題になっているという印象を強く持ちました。そういう点で、華僑のネットワークと琉球・沖縄ネットワークといいたましようか、そういうものをそれぞれにとらえて、比較してみたり、あるいは共通性を考えてみたいというのが一つの私のテーマです。

それからもう一つは、きょう午前中に冷戦、および冷戦後の沖縄の位置という議論がございました。一昨日の歴史の議論と、それからきょうの現在あるいは今後の議論とどういつながりを持つのか。どういうキーワードによって、それが連続したり断絶したりするのかという、ある意味では歴史と現在、あるいは歴史と将来を対比させながら問題を考えてみたい。これも重要なテーマだろうと思いますので、そこにも少し触れてみたいと思います。

最初に後者のほうから考えてみたいと思いますが、今朝のお話のなかで、朝鮮半島、沖縄の基地問題、アメリカとの関係、日本との関係が議論されました。私は、中国および中国の改革開放政策以降のアジア、あるいはアジアと欧米との関係という視点から少し問題を考えてみたい。これは、華僑・華人のネットワークがその外回りをつくっているわけですが、そういう観点から考えてみ

たいと思っています。

とくに、昨年の七月一日に香港がイギリスから返還されました。イギリス時代の香港の主権と、中国になってからの香港の主権が同じかどうか、必ずしも同じ主権だとは言えるとは思いませんけれども、香港が中国に返還されまして、その返還および維持の方式は一国二制度というかたちであります。この一国二制度という考え方自体は、一九六〇年代に中国側が台湾との関係を将来どうするかというときに一国二制度を提唱したわけですけれども、今回香港の問題でこういう大きな枠組みが現実に作られたわけです。

この一国二制度の考え方を少し広げてみまして、とくに中国が改革開放政策を行ったあと、外に対して影響力を拡大し始めている。経済だけではなく、香港返還後の南沙群島、あるいはいわゆる東南アジアに対する影響力の拡大ということが、非常に大きな問題になってきているように思います。

そういうなかで、一国二制度を中国の周辺地域に登場した一つの国際関係の変化というかたちで考えますと、冷戦時代に生じた分断、あるいは構造的な軍事関係というものが、一国二制度の登場および変化によつて新しい意味を与えられているのではないか。あるいは、新しい解釈ができるのではないかと考えております。

香港が一国二制度で、一九九九年の十二月二十日にマカオが一国二制度。もちろん、ポルトガルとイギリスは統治の仕方が違っておりましてけれども、いちおうマカオも一国二制度というかたちでこ

れから進みます。それから、私は沖縄、琉球も、非常に広い意味で一國二制度的な視点から考えられるのではないか。あるいは、考えるべきなのではないかと思っております。これはまた後ほど申し上げたいと思います。

それから朝鮮半島の問題も、これまで冷戦後の構造として東西の分断があつたわけですが、ここも一國二制度的な運営として考えていくことに今後なるのではないか。あるいはそのようにも考えられるのではないか。

それからさらに北にいきまして、シベリアロシアも、シベリアロシアは北東アジアの一員であるというかたちで、韓国、朝鮮、あるいは日本、中国東北部とかかわっています。本体ロシアとはまた違う側面をもっていると思います。そういうかたちで大陸部の周辺に、大陸、台湾関係も非常にホットなイッシュューとしてありまして、一國二制度ベルト的な、地域間関係の変化があらわれているのではないかと考えられます。

この問題は、本日の、あるいは今回の大きなテーマがグローバルバイゼーションとローカライゼーションという問題でありますけれども、このことは先ほどカルダー先生もご指摘のように、これまで国という枠のなかでグローバルも位置づけられ、国際関係が成り立ってきましたし、ローカルも国の下位にある地域として、その地域経済なり地域社会というものが位置づけられてきたと思います。

しかし、その国自体がそれを運営するのにたいへんお金がかかる。そして、世界のほとんどの国が

赤字財政といいますが、あるいは赤字国債で運営している。これはある意味では国家ということの機能が、これまでのように何でもやればよいということではなく、お金がたいへんかかるというところで、実質的にはその形をかえざるを得ない状況になっていることを意味しているとも思います。その面で逆にローカルとグローバルという方向が非常にはつきり表れてきたのだらうと思います。

したがって、これからの研究課題、あるいはアジア研究の課題というのは、一方ではグローバルをどう考えるかということと同時に、ローカルな地域社会、地域文化、また、そこにおける一つの判断の基準、評価の基準、価値体系というものを、これまでの国家の一部としての地域ローカルではなく、それ自身が一つのまとまりをもったものとして地域像を考えていかなければいけないということになるかと思えます。

そういう点で、たとえば沖縄が、あるいは琉球・沖縄がこれまで蓄積してきた歴史の議論や歴史そのものは、ローカルな内容をさまざまに議論する非常に多くの材料、議論を持っていると思います。したがって、琉球・沖縄を考えることは、それ自身を考えることでもあるわけですが、同時にある意味では日本とアジアを考える、あるいは中国とアジアを考えるための大切な仲立ちの役割を果していると考えられます。

歴史的に考えましたら、琉球は日本と関連がありましたけれども、日本の一部ではなかったわけですし、また中国に対して五〇〇年にわたる朝貢関係をもってきました。それから、明治時代になって

からも、やはり独自の地域文化は維持してきましたし、アメリカ時代も日本とのつながりは維持してきましたし、また日本復帰後も独自の問題、あるいは中国とのつながりというかたちで、琉球・沖縄の歴史は一国二制度的といえますか、あるいは一地方多関係といえますか、そういう多面性を持つていたと思います。

国家の時代になったときに、このようなネットワーク、あるいは多面性は、皆一面性に企画統一されまして、国家の枠内で機能せざるを得なかったわけです。したがって、たとえば琉球研究の第一世代の伊波普猷などが、国家の一部としての沖縄とか琉球の議論を、一方では地域文化の議論を進めながら問題にした。これも、やはり国家という枠のなかに、どのように問題を位置づけるかという問題意識なり必要性が先行していたということにもなりますけれども、現在は先ほど申しましたように、国家という枠組みがグローバルとローカルに分かれつつあります。

そうなりますと、歴史的なネットワークがもう一度そこに導入されるのではないか。あるいは、積極的に導入することによって、グローバルとローカルをつなぐという問題領域が要求される。そういう点で、私は華僑・華人のネットワーク、あるいは琉球・沖縄人のネットワークが、歴史の課題だけではなく、これからの課題として大きなキーワード、大きなテーマとして考えられなければいけないと思っています。

「アジアの海域の連鎖」

いままで申しあげました琉球・沖縄の大きな意味での中国、ここでの「中国」は、国家としての中国ではなく、地理的な中国を指しますが、ユーラシア大陸の東端の大陸部を中心とする非常に広い地域の一つの歴史的な秩序、私はそれを朝貢システムとか、朝貢貿易制度などと呼ぶことができると思っていますが、そのなかにおける地域間関係の問題。とくに中国が外に向かって開いたときには、必ず周辺関係がそういう影響をもってきました。

したがって、ネットワークという考え方で、先ほど絵所先生は小国、小さなところというご指摘をなさいましたが、朝貢制度のなかでは、ちょうど中継点といいたまいますように、貿易とか金融の中継点ネットワークという議論によって浮かび上がってくる。たしかに具体的な政策は賢く考えなければいけないと思いますが、香港、シンガポールの例と、琉球・沖縄の歴史などは十分に比較対比して考えることができると思いますし、考えなければいけないと思います。

ここで、いままで申しあげたことを図によってご説明したいと思います。沖縄での会議でありましたら、海ということは大前提ですけれども、東京のなかの会議で海と言う場合には、説明の前提が異なるような感じもいたします。アジアを考えますときに、私は経済地理的なアジア、あるいは政治地理的なアジアを考えています。理念としてのアジアというのは、もちろんたくさんの議論がありますけれども、先ほど言いましたように、琉球・沖縄を仲立ちとして日本とアジアの関係が考えられなければ

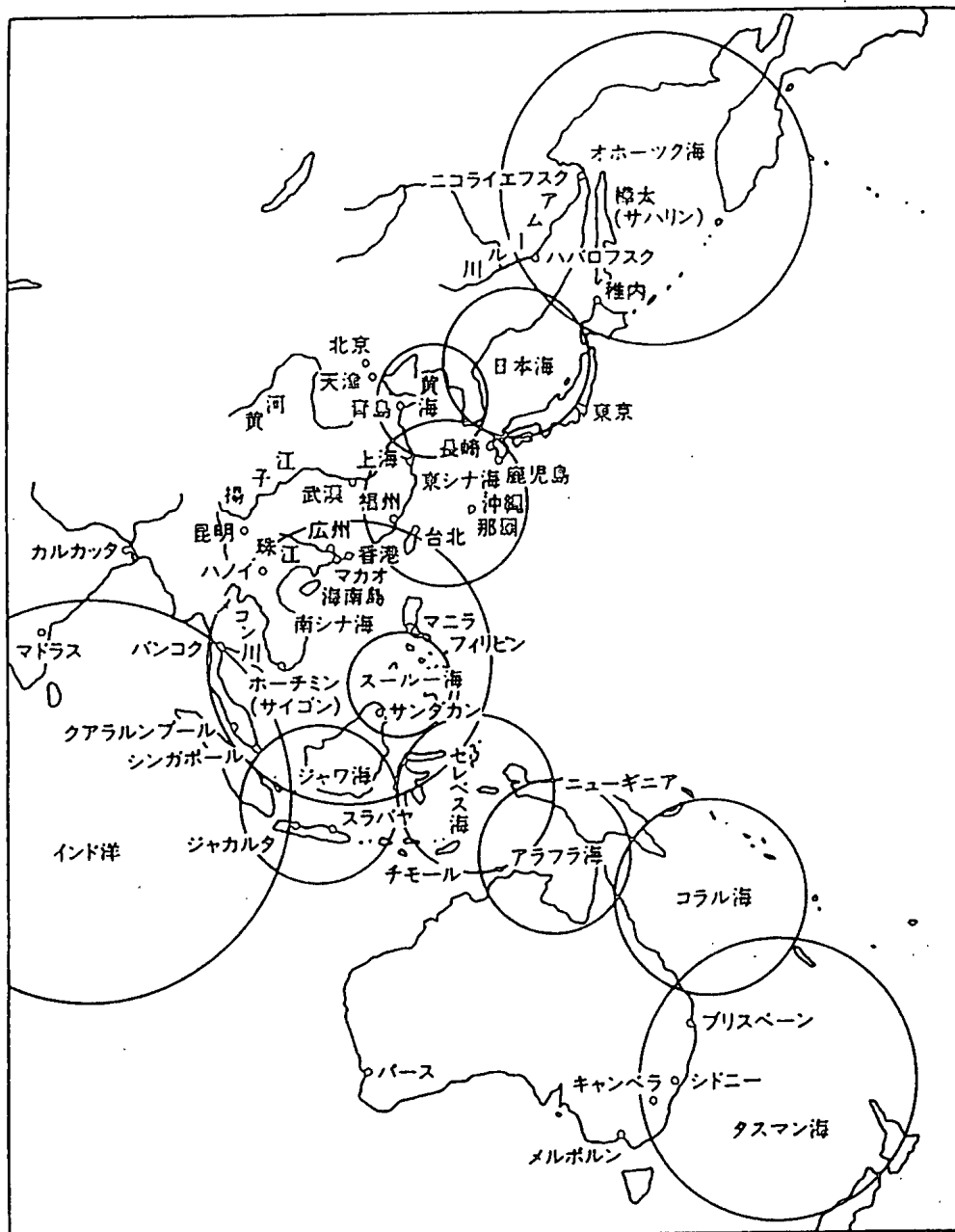


図 1 アジアの海域圏

ばいけないということも背景として、この海のつながりとしてアジアを考えるとということです。

とくに、ここに東シナ海（東海）、南シナ海（南海）がありますけれども、ちょうど沖繩の那覇は、この東シナ海の沿海交易のネットワークの一つでありましたし、南シナ海の海域交易とつながっていました。ちょうど北から大陸部とその周辺の半島部、島しょ部には、海の連鎖といえますか、海がつながっている。そして東南アジアはとくに海のつながりが複雑で、その意味では域内の交易、あるいは移民関係が非常に密であったことが予想されます。

もう一つ歴史的に、こういう海と海とが重なるところに重要な貿易港ができています。華南の玄関の広州は、のちの香港になります。それからインド洋につながっていくベンガル湾は、マラッカ、そしてのちのシンガポールになってきます。そういうかたちで、アジアを考えるとときに、海に向かつて、海と結びつきながらできあがってくる交易都市、交易港というものが重要であると思います。そして、この海の距離がちょうど相互に影響を与えながら、相互にのみ込まれることのない関係をつくってきたと思います。

それからもう一つ沖繩で特徴なのは、黒潮の流れとかたちで、日本、太平洋につながることで、東南アジアだけではなく、太平洋とのつながりも海のつながりから成り立っています。したがって、こういう海流を利用しながら、糸満漁師などの漁業のネットワークの歴史があったと思います。

先ほど朝貢貿易と申しましたけれども、十八世紀の末頃から世界は国家を単位とした考え方でできあがってきましたから、何を議論する場合でも国家が前提となっていました。しかし、私は地域という問題をもう少し多様なかたちで考えまして、大きな地域、小さな地域、そしてその地域間関係がどうであるのかという視角からアジアを考えたいと思っています。

問題は、国家を単位として、それが経済発展に向けて競争することによっていわばパイ全体が大きくなるという考え方ではなくて、地域間関係がどうかたちで変化するか。どうかたちで安定するのかという視点から問題を考えますと、中国という地域を中心として、その周辺に朝貢国、朝貢関係を利用した地域があります。

こういう大きな地域間関係は、中国の変化によって、例えば、中国の集権化、分権化という変化によって、また沿海と内陸の変化によって、あるいは北と南の変化によって、この周辺地域が異なった影響を受けるということになってくると思います。

そういう点で、論理はやや飛躍しますがけれども、現在のアジアの金融危機の問題は、中国の通貨、為替という問題を将来的にはどう考えるか。それと、たとえば日本がどうかかわるかとして問題を立てておいたほうがいいのではないかと思っています。歴史的に、この地域は中国を中心とした銀の経済でありましたし、現在も完全にオープンな市場は疑問であるという形で、何か「アジア」にまたは「東アジア」から「東南アジア」にかけた地域としての金融的なまとまりが必要であるという議論も十

分考えられます。

これは先ほど絵所先生のお話ですと、政府の役割の重要性の問題とも関連するわけですから、完全なオープンではないということは、外から見たら不透明であるということと同時に、歴史的には根拠のあったことで、欧米の金本位あるいは金為替本位に対して、アジアは銀の地域であって、金為替本位の変動をただちにアジアが受けるのではなくて、間に銀流通圏という仲立ちがあつた。

その歴史モデルを現在への対応として考えるとしますと、私は中国元為替圏といひました。大中華経済圏という議論もありましたけれども、香港、台湾の相互依存関係はたいへん大きくなつてきました。そういう点でむしろ将来的にはその通貨、為替がどうなるかということに対して、日本がどういう役割を果たせるのかという問題として、人民元通貨圏といひますか、人民元為替圏といひますか。そしてもちろん国際通貨ではありませんから、もつと工夫が必要ですからけれども、華僑・華人のネットワークによる何かこの課題のほうで、円の国際化よりも私は将来的には現実性のあるテーマではないかと思っております。

「アジアのネットワーク」

ネットワークという考え方を導入することにより、地理的に見て大きなところも小さなところも相互につながると考えられるということです。とくに、琉球の役割は、東南アジア、中国、朝鮮、日本、台湾というかたちで、多角的なつながりの結び目となつていたところです。

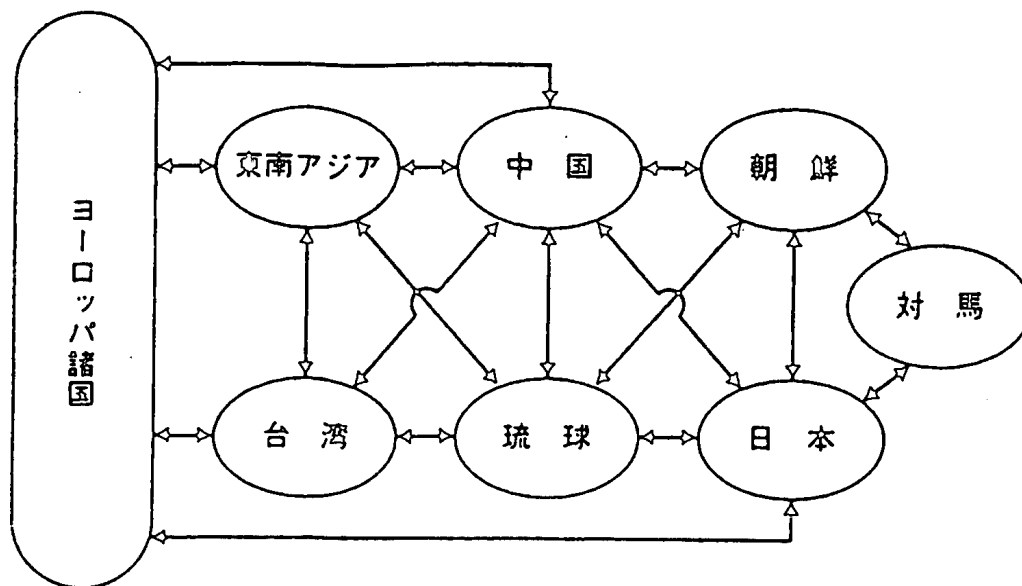


図 2 東アジア地域をめぐる交易ネットワーク (17~19 世紀前半)

図 3 はネットワークを経済地理的に、あるいは政治地理的に考える場合の一つの例です。この中心に香港を置きました。そこで、香港のさまざまな後背地、ヒンターランドのつながりが出てきます。たとえば香港を経由して、東南アジアから台湾のつながりが出てくる。あるいは、香港を経由して、日本のつながりが中国の沿海地方に出てくる。

そういうかたちで、たとえばこの中心にいま香港を置きましたけれども、もし那覇をここに置いたときに、やはり対岸の福建との関係、九州との関係、韓国との関係、台湾との関係、あるいは太平洋との関係というかたちで、ネットワークは広域のネットワークというだけではなくて、地域間関係を結ぶネットワークとしての役割という視点、そういう中継点、あるいは広域の中継港について、歴史的に考えられると思います。

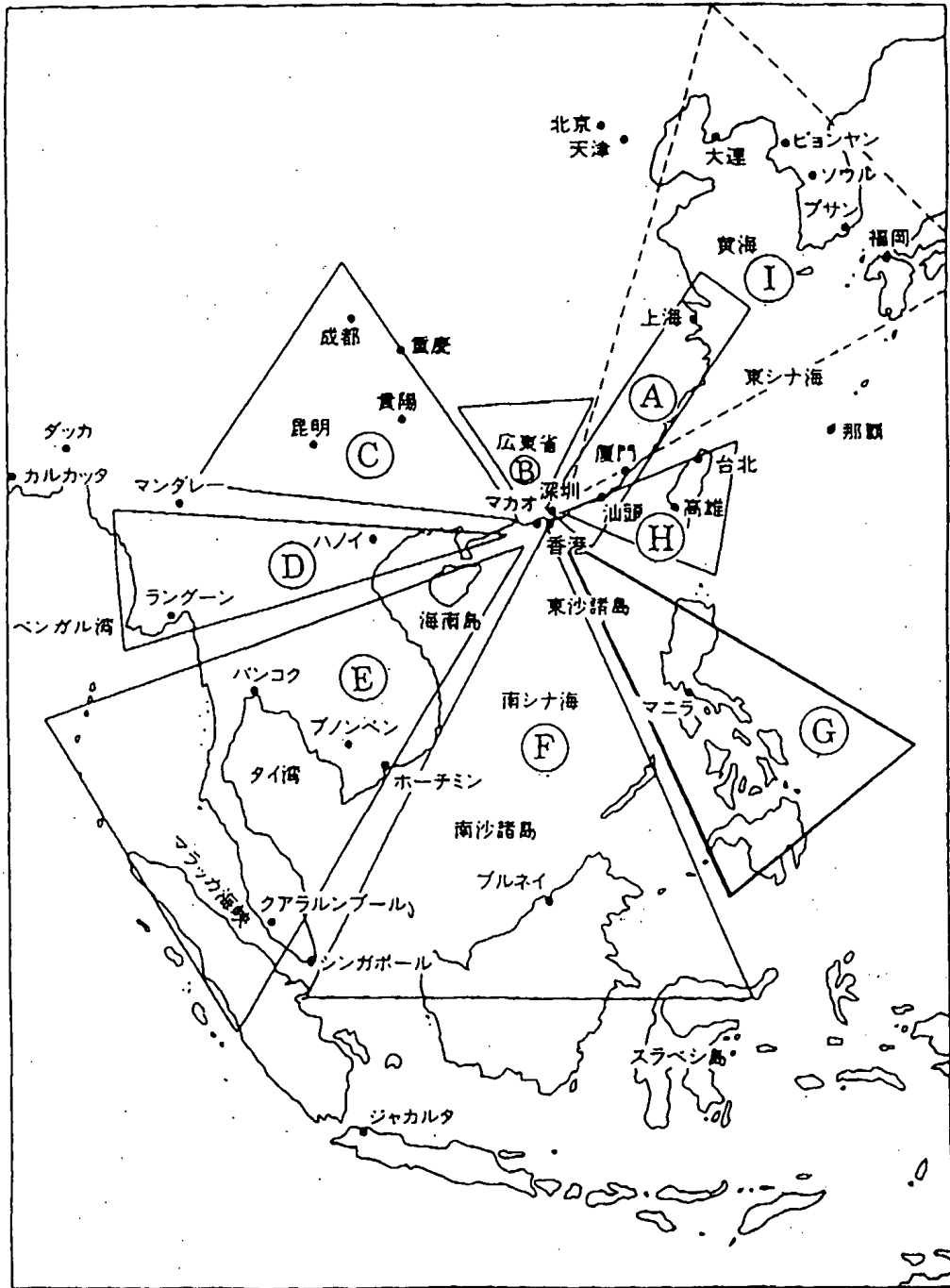


図3 [香港の多角的後背地関係]

ここでネットワークそのものについて、少し申しあげたいと思います。ネットワークは、国家とか制度、組織というがちりと作りあげられたものではなく、もう少し融通性のあるつながりを付けるものであります。そのことを、華僑のネットワークなどに沿って考えてみたいと思います。

ネットワークという言葉が用いられてから、ほとんどすべてのことをネットワークという言葉を使って説明をしようとするほどよく使われていると思います。そういう点で、ネットワークが結びつきの強さとして議論されてきた経過に対して、むしろ私はネットワークのもっている特徴は、その強さだけではなく、ある意味ではその弱さ、あるいは結びつきのほぐれやすさといえますか、そのようなかたちも含めて、もう少しネットワークの特徴を考える必要があると基本的に思っています。そういう姿勢から、少しネットワークというものを考えてみたいと思います。

ネットワークはすでにつながっているからネットワークですが、ネットワークを分解しますと、結びつきの単位となるところと、結びつける線となるところと、両方からできています。結びつきの単位となっているものが、ある程度共通でなければ、この結びつきはできてこないと思います。非常に異質なものが結びつくというのは難しい。このことは、ネットワークを考えたときにもう一段理念的に抽象化して考えられないかということであります。

とくに、中国社会、あるいは華僑・華人社会におきましては、地縁とか血縁、業縁、それから最近では文化的な価値を共有している文縁とか、それから善挙、よい行いを行うという善挙ですが、これ

らのそれぞれがある程度共通のユニットを表現しながら、その内部がつながっているという言い方をしています。ご承知のように、そのような結びつきのユニットというものが、ある程度共通であることによつてネットワークができるということになっています。

さらにそういう結びつきはいろいろな種類でできるわけですけれども、いま仮説的に考えていますことは、大陸南方の地域は相続制度が非常に強いところでは、その相続制度は、いわば均分相続で、女性は排除されていきましたけれども、成り立っていました。ということは、人が生まれた瞬間から、すでにある部分を相続できるということが約束されている。ですから、生まれた瞬間に銀行に預金があるようなものです。ですから、その仮想預金を使って、若いときからやりとりができる。そして現在でも、生きている父親の相続が約束されているということ、銀行から子どもが金を借りることができるという状況が香港社会などではあります。

このように、長い間の華南社会の均分相続における財産の取り分を、いろいろなかたちでやりとりする。そこがネットワークのユニットで、それを地域的に表現すると地縁となりますし、家族として表現しますと血縁となりますし、ビジネスとして表現したら業縁となります。

そういう点で、単位のところを「股」と呼ぶことができます。これは株式の中国語で、「関節」という意味です。関節がつながることによつて一つの人間ができあがると言えるわけですが、そういう「股」を共有しているというかたちで、ある意味ではネットワークができる核であります。私は高良さんが

おっしゃっている琉球社会の「ひき」というつながりにたいへん関心をもっておりまして、やはり何かを結びつける役割が、その地域社会に特有な表現、かたちで存在しているのではないかと思っっているわけです。

ネットワークをもう一步理念的あるいは原理的に考えたいということと同時に、他方では、ネットワークがそれほどかっちりした組織や制度ではないということをよりの確に表現する場合に、経済の側面で考えますと、市場、マーケットと、会社などの組織あるいは制度の、ちょうど中間にネットワークという考え方を置いてみたいと思っています。

マーケットという不特定多数が不特定多数と交渉し、交換することに対しては、ネットワークはやはり自分たちの利益を守る排他的な面をもっていますけれども、会社とか組織、制度に対しては非常に融通無碍な特徴ももっていると思います。そういう点で、ネットワークの位置を経済史的に考えますと、ちょうど市場と会社とか制度など組織の中間に位置する。

これまで経済学、経済史は、マーケットか組織かということでも議論してきましたけれども、ネットワークという概念をその間に入れることによって、もっと多様な経済的な現象、さらに社会的な、あるいは経済文化にわたる現象を説明できるのではないかと思っております。

次に、ネットワークの金融的な側面を地域社会に即して考えますと、華人社会では「会」があります。ちょうど沖縄の「摸合（もやい）」にそっくりであります。私は、摸合のほうは、よりビジネス的

な運営がなされていると思いますけれども、そういう地域社会の資金の内部ネットワークがあります。ヨーロッパ人のアジアの観察は、アジアの人たちはお金を、ある意味ではタンス預金しかしないと見ておりました。けれども、実際にはたとえば韓国、朝鮮における契という問題、あるいは日本における頼母子、沖縄の摸合、中国の会、シンガポール、インドのトンティン、インドネシアのアリサンなど、そういう資金の内部ネットワークが地域社会をつくっているわけです。

資金の外部ネットワークとは、たとえば華僑送金に見られるようなさまざまな方向を取ってお金が動くというかたちで、ある意味では金融市場の基礎的なネットワークを準備しているとも考えられると思います。そういうかたちで、とくに資金の流通をめぐってネットワークという概念がぴったり適応できるということも指摘してみたいと思います。

最後に、ネットワークが政治的な問題にも適用できないかということを考えています。いままで、たとえば家族のつながりを拡大された家族としてのネットワークと呼ぶなど社会学の概念から発生しました。主に華僑投資のとき、中国の周辺、東南アジアの華僑の投資のネットワークとして、ネットワークが使われました。主に経済的、あるいは社会的な結びつきです。

私は、政治的な問題でネットワークという概念を使えないかと思っています。たとえば、琉球・沖縄ネットワークといったときに、あるいは朝貢貿易というネットワークも想定されるわけですしけれども、政治関係としてネットワーク的な特徴、とくに、外とつながって、移民であれ貿易であれ、情報

であれ、やりとりをするつながりをやはりネットワークと表現できます。

そして、それは先ほどの海の地図で見ますと、中国華南の沿海から東南アジアにかけての一带における政治は、ネットワーク的政治構造、あるいはネットワーク的政治権力ともいえる。それは、北の土地を中心とした農本主義的な、農業にもとづいた排他的なそびえ立つ権力をつくるという、北の権力とは違う、南の政治関係の特徴を表すものとしてのネットワークです。

そうしますと、たとえば台湾・大陸の関係も、台湾が、自ら、どうかたちであれ一つの権力の方向を追求したとしても、歴史的、あるいは政治地理的に台湾の持っている歴史的な条件とはネットワーク政治にならざるを得ない。そういうかたちで考えていきますと、現在の国家主権という唯一の単位しか持たない国際関係、世界関係のなかで、ネットワーク政治という考え方が導入されることによって、より大きな地域間関係のカバーができたり、あるいはより小さな地域間関係の安定、不安定を処理することができたりするのではないかと思っております。

このようなかたちで、ネットワークを華僑・華人の移民、貿易、送金に絡めて、それが沖縄の、また琉球・沖縄の持っているウチナンチューネットワークであるとか、摸合であるとか、類似性を持つものとして申しあげたわけです。

琉球・沖縄の場合には、それにとどまらず、もっと広い地域的なネットワークをもっているように思います。とくに、たとえば朝鮮半島との関係を考えますと、ヨンセイ大学のソル先生がホンギルトン洪吉童とい

う、日本でいうと義経のような、中世の人物がいます。その人は族譜のなかに尚家と同じ、尚直という名前で出てきます。そこを琉球王朝とつなげて、洪吉童ホンギルトンは後半生を宮古島で活躍するという話があります。

これは史実に沿っているかという点、必ずしも言えない。義経がモンゴルで活躍する、という伝説を思い出させるものではありませんけれども、韓国の知識人の視野は琉球にあることに注目しています。琉球・沖縄から見れば、北東アジアのつながりを維持している、あるいは、さらに東南アジアとのつながりも、琉球・沖縄の歴史のなかで非常に特徴的なことであろうと思います。その点では華僑、華人のつながりも非常に多様ではありますけれども、地域的な、あるいは異なる文化への接触の多様性からいったら、私は琉球・沖縄の歴史の広さ、深さを感じるわけです。

とくに今回は沖縄文化研究所が主催なさった国際会議であります。私が『歴代宝案』を勉強させていただくときに、沖縄文化研究所の、たとえば鄭良弼本などでたいへんお世話になっていました。そういうことで、きょうここで私が考えることの一端を申しあげることができました。これはたいへん光栄に存じます。